

2 フィールドから学ぶ ——ブータン民俗音楽研究をふりかえって

1 ブータン音楽家たちの伝統音楽観

私は、2011年からブータンのツァンモ (*tsangmo*=歌の掛け合いによって相性占いをしたり、喧嘩をしたりする遊び歌)の実態を探るために、ブータン各地で巡歴・移動型の調査を日本人・ブータン人と共同で行って来ました。その過程で、民俗音楽の担い手、研究者、教育者とお付き合いをしてきました。今回は、私を含めた日本側とブータン側とで、どのような出会いがあり、お付き合いがあって、それを経て互いに影響を与え合い、どういう変化・展開があったのかについて、時系列でご紹介したいと思います。

私がブータンに行くよりも前に、新潟大学の伊野義博先生が2010年にパロでツァンモの調査をされており、その概要(6音節4行詩で歌われることや定型の旋律があること、相性占いと喧嘩の2種類の遊び方があることなど)が把握されています。この時の伊野先生とパロ教育カレッジ講師のツェワン・タシ(Tshewang Tashi)先生と通訳ガイドのペマ・ウォンチュク(Pema Wangchuk)氏との出会いが、その後の共同研究の大きな推進力になっています。

2011年は、伊野先生、東京音楽大学の加藤富美子先生、広島大学の権藤敦子先生、国立音楽大学の山本幸正先生、黒田、ツェワン先生、ペマ氏が同行し、パロ、ティンプー、プナカを訪れて音楽教育者、研究者との研究交流を行いました。

プライベートのAA-Yang音楽学校では、伝統音楽を残しつつも現在の子どもたちが分かりやすいようにとブータン伝統音楽と外国音楽(インドの音楽と西洋音楽)の2クラス・システムを採用していました。代表を務める音楽家ジグミ・ドゥッパ(Jigme Drukpa)氏は、ブータン文化の多様性も認識されていて、自文化の伝統を知るべきなの

は、他文化(地域文化、外国文化、現代文化)の理解のためであると言います。ブータンの伝統とは、自らの精神的幸福、平和な心をもって暮らすこと、心を大切にすることであり、伝統音楽を残すことが、そういう考えを残すことにつながってほしいとおっしゃっていました。

ブータン音楽研究所(Music of Bhutan Research Centre)では代表の民族音楽学者ケン・ソナム・ドルジ(Kheng Sonam Dorji)氏の多彩な活動(伝統音楽の調査、記録、アーカイブス化や高齢伝承者へのインタビューとドキュメンタリー制作、公共文化活動として歌や踊りのコンペティションの企画、審査など)を伺い、その活動が伝統音楽の保存と同時にその変化について現在の子どもたちに伝えるためであることを伺いました。

プライベートの伝統音楽舞踊団ブンツォ・ダヤン(Phuntsho Draynag)代表のアプ・デンゴ(Ap Dengo)氏(ツェワン・タシ先生の父)からは、ダムニャンにまつわる天女物語や仮面舞踊を創った高僧ペマ・リンパ(Pema Lingpa)の話をお伺い、ブータンの歌や踊りには全て意味(物語)があり、ブータン人にとっての教養や知識とは、ブータン仏教にまつわる物語、仏教の教えを学ぶことを指しているという話を伺いました。

2 地域での伝承が消えつつあるツァンモ

2012年は中部プナカのチャン・イイ(Chang yee)村でツァンモの調査を行いました。私はこの時、中年女性たちが大笑いしながらツァンモで遊ぶ様子に大変興味を抱きましたが、聞き取りで今日30年~40年ぶりにツァンモをしたという話を伺い驚きました。ツァンモは本来子どもの遊びであることを知ると同時に、現在の子どもは学校で忙しく、携帯電話で遊ぶなど興味を示さず、



図1 これまでの調査地と調査予定地 (黒田 2022)

ツァンモが現在消えつつある状況を知りました。

2013年は中部トンサのツァンカ (Tshangka) 村とタンシジ (Tangsibji) 村でツァンモの調査をしました。どちらの村でも中年の男女が20年～30年ぶりに再現してくれたものでしたが、次々と歌詞を思い出してたくさん歌っていただきました。彼らが子どもの時に、牛や羊の放牧期間に集まりツァンモで遊んでいたということでした。ツァンモで遊ぶ者同士は、相手の様々な状況を理解して歌うから予言や占いにもなるし、喧嘩のツァンモも互いに従来の性格を理解し合った上で戦うので、強い表現もできるのだということでした。ここでも近年の生活変化、子どもたちが学校に行くようになったことが、ツァンモが歌われなくなった主な原因だということでした。

少しずつツァンモの実態が分かってきたのと同時に、ツァンモがブータン人にとって大切な伝統音楽文化なのではないかと感じ始めていた私たちは、目の前で消えつつあるツァンモをどうすべきなのか、日本人には何ができるのか、そもそも何かすべきなのだろうかと考えさせられました。

3 学校やメディアなど 多様なツァンモの伝承

2015年は、中部ウオンデュポダン県にあるサムテガン中央学校 (Samtengang Central School) のツァンモ大会を調査しました。学校でのツァンモ大会は、喧嘩のツァンモの形で歌われ、審査員が勝敗を決定するコンペティションです。歌詞の性格によって内容は、ニエン・ルー (niyen lue 相

手を褒める)、ダ・ルー (dra lue 相手を攻撃する)、ダニエン・バルマ (dranyen barma 相手と歩み寄る) に分けられ、この順番に全体が構成されていました。相手を攻撃するダ・ルーで観客の生徒たちが歓声をあげて盛り上がるのですが、喧嘩のまま終わらないようにという配慮でした。

この年、ティンプーのケルキ (Kelki) 高等学校のガワン・ナムゲル (Ngawang Nyamgyel) 先生の取組も伺いました。全校生徒800人に夏休みの宿題として、出身村や家でツァンモの歌詞を集めさせ、各クラスでツァンモ大会を実施して、21人の最終決戦をブータン国営放送 (BBS) で放映するという取組です。また、メディアにおけるツァンモについて、クズ (Kuzoo) FMでツァンモの時間を担当しているツェリン・デマ (Thering Dema) 氏、BBSで「ツァンモ・テンミ (Tasangmo Thenmie)」を担当しているダワ (Dawa) 氏に、視聴者参加型のツァンモの実際と進行状況についてインタビューを行いました。

4 ツァンモ大会と国際シンポジウムの開催

2016年は、日本・ブータン民俗音楽研究会として「ブータンの宝石ツァンモー未来に文化をつなぐー」と題したツァンモ大会と国際シンポジウムを開催しました。ツァンモ大会は、ケルキ高等学校とティンレガン中央学校 (Thinleygang Central School) の対抗戦です。チェアマンを務めた王立舞踊団 (Royal Academy of Performing Arts, RAPA) 主任研究員のクンザン・ドルジ (Kunzang Dorji) 氏の生徒たちに向けた挨拶が印象深かったのでご紹介します。「ここにいる日本人のほうがツァンモの大切さを分かっています。ブータン人はこれから伝統文化の重要性について考え直して見る必要があります。私たちがGNH (Gross National Happiness: 国民総幸福) の下、幸せに過ごすことができるのは全て親世代のおかげです。ブータンは、豊かな伝統文化によって世界中に知られるようになりました。世界地図でブータンを見ると、ドット (点) しかありません。料理の中の塩

のようなものです。だからこそ伝統文化を大切にしなければなりません」。大会は僅差でケルキの勝利となり盛会のまま終わりました。

地域で伝承されるツァンモと学校のツァンモ大会は次の点が異なります。まず大会では喧嘩のツァンモの形のみで、最後はダニェン・バルマで仲よく終わるという構成がとられていました。また、聴衆の存在と規模が異なります。今回600人の生徒たちがツァンモを「観戦」していました。ツァンモを歌う生徒のほうも、マイクを使って身振り手振りを大きくパフォーマンスしていました。特に強い言葉で相手をやり込めるダ・ルーのときに、観客は「フォー」と大きな歓声を上げて盛り上がっていました。地域のツァンモには見られないイベント的な盛り上がりがあったと言えます。審査員が勝敗を決定する点も大会ならではの特徴だと言えます。一方で、そこで歌われる歌詞は、学校という教育現場にもかかわらず、相手を嘲笑したりする攻撃的な歌詞も、露骨に相手を誘う求愛表現もタブー視されることなく歌われていました。また、歌う行為として、相手の歌の内容を理解して即座に歌い返す力、即興的に言葉を節に乗せて気持ちを伝える力、歌でコミュニケーションをする力が審査でも重視されるなど、学校でツァンモを歌う社会教育的な意義も見られました。この点は地域で伝承されるツァンモと共通している点だと思います。

シンポジウムは、これまでの日本側の調査・研究の成果をブータンの人々に公表するとともに、ブータンの学校や放送でのツァンモの現在の状況や取組について関係者で情報を共有して意見交換をすることを目的に開催されました。各パネリストの言葉を少しだけ紹介します。RAPA 主任研究員のクンザン・ドルジ氏からは、日本側の報告に多くのことを学んだと感謝が述べられた後、ツァンモは牛飼いが暇なときにやっていただけではなく、法要や仕事の合間など日常的に行ってきたことが学校の大会という形になっても生きていく要因なのではないかと語られました。クズ放送



図2 ツァンモ大会の様子 歌詞にタブーはみられなかった
(黒田 2016)

のツェリン・デマ氏からは、会ったこともない遠くの人同士がラジオを通してツァンモを掛け合うことで、土地ごとの違いとか、相手のうまさに気づいたりすることの重要性が語られました。ブータン国内における文化の多様性がもっと認識されるべきだということだと思えます。長年の共同研究者パロ教育カレッジ講師のツェワン・タシ先生は、調査中、朝起きてから夜寝るまでツァンモのことばかり話している日本人に対する驚きが語られた後、現在のようにスマートフォンで友達申請するのではなく、かつてのようにツァンモで友達をつくる、そういうことを大切にしていきたいと思うようになったと語られました。ゾンカ開発委員会の主任研究員、ペマ・ウォンディ (Pema Wandgi) 氏からは、ブータンの諸言語の消滅の危機についての懸念が強く訴えられました。母語と思考の方法は密接に関係していて、言葉が死ねば思考の方法も失われる。言葉がなくなると、歌、ツァンモも一緒になくなっていくのだとブータン文化に対する見解が語られました。

ブータンの言語状況として、谷ごとに言葉が違うと言われるほどの多言語状況があります。1970年代に西ブータンのゾン(城塞)で使われていたエリートの言葉ゾンカが国語になります。学校教育ではゾンカと英語の2クラス・システムが取られていますが、このことは、母語でない子はゾンカも英語も学習しなくてはならないということになりますし、自分の母語がなくなってしまう懸念もあります。実は、ゾンカ自体も消滅危機言

語になっています。ですので、ペマ・ウォンディ氏の言葉がなくなると文化も一緒になくなっていくという懸念は、地域の文化だけではなく、ブータン国家自体に対する懸念でもあったと感じられました。シンポジウムでは、日本側のツァンモ調査が評価され、注目され、特に民俗文化、地域文化としてのツァンモの重要性が認識され、その後の様々な取組が増えていく機会になりました。クンザン・ドルジ氏から、地域の歌踊りであるジェイ・ジェム (zhey zhem) の調査の必要性が訴えられ、地域文化が中央にあまり把握、重視されていない状況も知ることになりました。このことは、この後の私たちの調査に影響を与えています。この後の調査では、ツァンモ以外の歌踊りや地域に伝わる古い歌なども調査するようになりました。

5 パロ教育カレッジとの共同研究で みえてきたブータンの伝統音楽観

2019年、パロ教育カレッジのドルジ・ティンレー (Dorji Thinley) 学長のもと設立中であったヘリテージ・エデュケーション職能開発センターの伝統音楽教育研究セミナーに招待され、伊野先生が「日本の伝統音楽教育の現状」、権藤先生が「日本の音楽教育の歴史」、黒田が「日本人から見たブータン文化の良いところ」と題した発表を行い、教員たちと研究交流を行いました。

セミナーの後、西部ハ (Ha) 県にツァンモの調査に行きました。印象深かったのは、私たちの調査の影響でその日の夜、ハのあちこちでツァンモが歌われるという現象が起きました。また、この時に WeChat のツァンモ・グループに多くの人々が参加しているということを知りました。私たちが調査してきたような昔ながらの村でのツァンモは歌われなくなっている一方で、WeChat のツァンモ・グループのような、新しい歌手、ファン・聴衆、ネットワークが生まれている、新しいツァンモが生まれてきているとも言えます。

2020年からパロ教育カレッジの先生たちと、ヘリテージ・エデュケーション、特に伝統音楽の

教員養成カリキュラムの共同開発と、そのための調査研究を行っています。そこでは、お互いの音楽教育、伝統の捉え方の違いなども見えてきています。

最後に現時点での気づきをお伝えしたいと思います。ブータンにおいても、伝統的価値観の存続・維持を期待する認識は日本と同じだと言えます。ただ、教育における伝統音楽の取組、その実践を見てみると、伝統音楽と認識される範囲はもっと広いように思われます。例えば、チベットの歌がブータンに来たらブータンの歌に、ブータンの歌がチベットに行ったらチベットの歌になるといったように、そもそも伝統音楽は混雑性とか雑種性を持って存在してきた背景があって、そこに見られる伝統音楽観は、より古くからあるものというより、ブータン人オリジナルのものという意味合いのほうが強いと言えます。例えば、学生に子どもの歌 (nursery rhyme) を創作させる時にも、この旋律、この音階を使いなさいという指示は出さず、それまでの伝統楽器の習得体験を基に創作されていました。そこでは伝統音楽の旋律を固定的に残すことよりも、ブータンの文化を歌で子どもたちにどう伝えることができるのかが重視されています。ここには新しいスタイルを創造、共有、今ある文化として受容することも伝統と捉えられていて、その結果生まれた歌が伝統音楽として認識されています。このように、伝統・文化・音楽・教育など、随時互いにどう捉えているのかというのを確認し続ける必要があると考えています。このことは、他の文化 (other cultures) との出会いとそのお付き合いは互いに影響を与え合うし、また、文化は変化していくものであるという考えに基づいています。

【参考文献】

伊野義博、黒田清子、権藤敦子編著『ブータンの遊び歌 ツァンモの研究：21.5世紀音楽教育への序章』日本・ブータン民俗音楽研究会、2022年。

(黒田清子)